



とよたの未来を  
考えよう!

豊田市都心地区空間デザインをかんがえる。

# カスタマイズとよた!

## 第2回 市民ワークショップ

日時:7月24日(日)

開場:13:10

開始:13:30

場所:豊田市役所東庁舎7階大会議室

### プログラム

13:30 - 13:40	ご挨拶
13:40 - 13:50	第1回市民WSの振り返り 推進会議のまとめ／本日の議題
13:50 - 14:00	星先生レクチャー
14:00 - 14:25	つくる・つかうチームの提案内容説明
14:25 - 15:20	各班ワークショップ
15:20 - 15:30	- 休憩 -
15:30 - 16:15	各班発表
16:15 - 16:30	まとめ

東西のあり方。コンセプトの整理

豊田市の自然を象徴する矢作と毘森。これらの名を冠した東西二つのエリアは公共空間の使われ方に明確な違いをもち、東西二つのエリアの個性が豊田市駅で結節することで、豊かな駅前空間をつくります。ここでは、それらのあり方をまとめてみました。



利用 街を「利用」するための場づくり

日常の使われ方

街に「参加」するための場づくり 参加

2 駅間を行き交う大勢の人々。松坂屋と T-FACE いう 2 つの大きな百貨店。バスターミナル。飲食店。毘森口は、豊田市のなかでも特に賑わいが集中する場所です。そして、2 つの大きな百貨店の周辺には、いくつもの店舗が面的に広がっています。豊田の都心としてのこれまでの利便性や快適性が集まるエリアです。この街と人をつなげるために、公共空間は人々が休めたり、待ち合わせできたり、憩えたり、飲食できたりする場所をたくさん設けます。そしてその場所を商業者、来街者双方が利用することで、豊かな場づくりを目指したいと考えます。



矢作口には、その軸線のさき豊田スタジアムがあります。また、今後シネコンが完成し、圧倒的な蔵書数を誇る図書館やホールをもつ総合館や、拳母神社など豊田市の文化的なコンテンツが多く存在しています。一方でこれらの施設に対して現在ではほとんどの人が車で来訪してしまうため、中央の通りは目的性が薄く閑散としてしまっています。そこで、この通りに目的性を持たせるため、この場所を市民に使ってもらおう場として考えます。多様な文化施設と連携し誰もが自由にイベントや活動ができる場所。いわば「楽市・楽座」のようなあり方を目指します。今後新しいまちが作られるなかで、暫定整備の段階からまちに参加できる仕掛けを行います。

連鎖 たくさんの「小さな広場」とそこに入り込む森

空間構成

「おおらかで一体感のある」ストリート型広場空間 連続

公共空間を利用してもらうために、毘森口では例えば高齢者、例えば子供、例えば子育てをしているお母さん、例えば学校帰りの高校生など様々な利用者を想定して、その人々の使い勝手を考えカスタマイズされた空間が、街の随所に生まれます。こういった小さな広場がたくさん生まれ連鎖することで、誰もが思い思いのお気に入りの場所を見つけられるようになり、街はもっと利用されると考えます。そして、その多様な小さな広場のつながりに森が侵食していくことで、心地の良い木陰と四季の移ろうまちなか空間を人々にもたらします。



小さな広場の連鎖が作る多様な風景



大きな連続性の中に作られる滞留空間

駅を出た時に矢作川から豊田大橋、さらにはスタジアムまで伸びる軸線を感じるようなダイナミックで一体感のある広場空間で矢作口を満たします。東口広場と停車場線を一体的に捉え、矢作川のようなおおらかにつながる構成の中に、誰もが参加できる活動スペースを計画していきます。また、大きなイベントに対応できる広い空間や、拳母まつりの見せ場として山車が活躍できる場づくりなども受け入れられる空間構成を目指します。また、毘森口が森で満たされていくのに対し、矢作口は水をダイナミックに使用して象徴性をもたせます。

居心地 「日常」 + 「居心地の創造」

空間のあり方

「日常」 + 「祝祭性の獲得」 祝祭

公園が街に入り込み、建築を開き、人々がそのなかを自由に過す。毘森口が目指すべき姿は、公共空間の居心地を最大限追求し、その結果この場所で商業を営む人々も、この場所に訪れる人も豊かにすることにあります。そのためには、余計なものは極力排除し、シンプルな空間構成の中に多様な時間の過ごし方ができるよう考え抜かれた居場所が、丁寧にそして多く作られる必要があります。



矢作口は、日常的に多様な市民活動が自由に展開できる場として、またそれらが人々の目的となるよう、様々なイベントを受け入れる「祝祭性の獲得」が必要になります。そのためにフレキシブルでオン/オフの切り替えなどの使い分けができる街の表舞台のようなあり方が求められます。日常的な活用においても、年に数回のイベントにおいても、対応可能な滞留空間のあり方とその配置を実現します。また利活用に必要なインフラをしっかりと仕込んでいきます。